

ンガンを添加し、同時処理を行う。

なお、一般的な発生園では両処理法とも1回の処理で十分な効果が得られるが、重度な発生園では散布による追処理が必要である。

9. お わ り に

以上、ブドウのハウス栽培における生育調節剤の利用について簡単に述べてみたが、いずれの生育調節剤ともハウス栽培の目標である熟期

の促進、品質の向上および生産の安定のために効率的に利用され、経済効果も得られてブドウ栽培の発展に寄与している。

今後は、より効果の高い薬剤、また開花の促進剤や有核果実に対する着色促進剤などの開発が要望されており、一方、これらに関する新薬については現在研究中のものもあり、これからの研究成果が期待されている。

(以上)

昭和60年度冬作(麦類・いぐさ・水稻刈跡) 関係除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部

昭和60年度冬作関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会は、昭和61年9月3日、薬業健保会館において開催した。

本年度供試された冬作関係除草剤は、作用性試験12剤、適用性試験30剤、生育調節剤は、作

用性試験1剤、適用性試験2剤であった。

このうち、適用性試験については、慎重に試験成績を検討し、実用化についての判定を行なった。

その結果は、次表の通りである。

昭和60年度 冬作関係除草剤・生育調節剤試験中央判定および使用基準

A. 小 麦

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処 理 時 期	使用量/a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
2. ANK-553 細粒 ・ペンディメタリ ン……………2%	実・継 前年通り	土 壌	播 種 後	500~600 g	壤土~埴土 〔但し、温 暖地西部 は砂壤土 ~埴土〕	寒冷地(畑 作)、温暖 地以西(水 田裏作)	1) 碎土・整地・覆土を 丁寧に行って均一散 布に留意する。
4. BAS-3510 (Na) 液 ・ペンタゾン(Na) ……………40%	実・継 暖地への 拡大	茎 葉	麦生育期、 雑草発生揃 期	10~20 ml	全 土 壌	寒冷地(畑 作)、温暖 地以西(水 田裏作)	1) 広葉雑草対象。 2) 体系処理: イネ科雑 草に有効な既登録除 草剤と組合せて使用 する。

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処 理 時 期	使用量/a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
5. <u>グリホサート液</u> ・グリホサート 41%	実・継	茎 葉	耕起前7～ 14日	50～100ml	全 土 壌	寒冷地（畑 作）	継：低薬量について。
6. <u>Hoe-866液</u> ・グルホシネート 18.5%	継	処理時期の検討。					
7. <u>HOK-833</u> <u>水和</u> ・MCC 40% ・DCMU 7%	実・継	土 壌	播 種 後	75～100g	火山灰土壌	寒冷地（畑 作）	継：薬害の発生要因に ついて。
8. <u>HW-624</u> <u>水和</u> ・未公開 70%	継	初年目、成分未公開。					
9. <u>MK-140N</u> <u>水和</u> ・アクロニフェン 30% ・ニトラリン 45%	継	効果、薬害の再検討。					
10. <u>NY-712</u> 水和 ・ピリデート 45%	継	効果、薬害の再検討（非イネ科雑草に効果高く有望）。					
12. <u>トリフルラリン</u> <u>乳</u> ・トリフルラリン 44.5%	実・継 （前年通 り）	土 壌	播 種 後	20～40ml	（全土壌）	（全 域）	〔寒地は継続〕
13. <u>HOK-15</u> ① <u>細粒</u> ・DBN 1% ・DCMU 0.5%	実・継 （前年通 り）	生育初期	小麦2～3L （スズメノテ ッポウ1.5 Lまで）	500～600g 400～500g	壤土～埴土	寒冷地（畑 作） 温暖地（水 田裏作）	1) 砕土、整地、覆土を 丁寧に行って均一散 布に留意する。 2) 冬期寒冷の年には 600g/aで薬害の危 険性があるので注意 する。
14. <u>UBH-508</u> <u>水和</u> ・未公開 20%	継	成分未公開					
15. <u>YF-65</u> 液 ・パラコート10% ・ジクワット14%	実・継	茎 葉	耕 起 前	30～50ml	全 土 壌	寒冷地、暖 地	1) 周辺作物への飛散に 注意する。

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量／a	適用土壌	適用地域	使用上の注意
16. アイオキシニル 乳 ・アイオキシニル 30%	実・継 〔処理時 期拡大 可能〕	茎 葉	広葉雑草発 生揃（越冬 前）	16～24m /	洪積火山灰 土	全域(畑作)	1) 広葉の農作物の茎葉 に散布液が飛散しな いように注意する.
			ヤエムグラ 2～4 L		全 土 壌	暖 地	
			幼穂形成期 (<u>広葉雑草</u> 発生始)	10～20m /	全 土 壌	寒地(畑作)	
17. Dowco 433 乳 ・フルロキシビル 30%	継	効果, 薬害の再検討.					
18. KUH-813 乳 ・オルソベンカー ブ 50% ・リニュロン 7.5%	実・継 〔土壌拡 大可能〕	土 壌	播 種 後	60～80m /	全 土 壌 〔寒冷地南 部, 温暖 地東部は 砂壤土を 除く〕	寒冷地(畑 作), 寒冷 地南部以西 (水田裏作)	1) 砕土, 整地, 覆土を ていねいに行って, 均一に散布する.
19. KUH-813 細粒 ・オルソベンカー ブ 8% ・リニュロン 1.2%	実・継 〔処理法 拡大可 能〕	土 壌	播 種 後	400～500 g	砂壤土～埴 土 〔寒冷地お よび温暖 地西部は 砂壤土を 除く〕	寒冷地(畑 作), 寒冷 地南部以西 (水田裏作)	1) 砕土, 整地, 覆土を ていねいに行って均 一に散布する.
		生育初期	スズメノテ ッポウ 2 L まで	500～600 g	砂壤土～埴 土 〔温暖地東 部は砂壤 土を除く〕	温暖地東部 暖地(水田 裏作)	
20. EL-107 水和 ・イソキサベン 50%	継	効果・薬害の検討, 特に後作物に対する影響.					

B. 大 麦 類

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量／a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1. MK-140N 水和 ・アクロニフェン 30% ・ニトラリン 45%	継	効果・薬害の再検討。					

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量/a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
2. YF-65 液 ・パラコート10% ・ジクワット14%	実・継	茎 葉	耕 起 前	30～50m/	全 土 壌	寒 冷 地	1) 対象：六条大麦。
3. KUH-813 乳 ・オルソベンカー ブ 50% ・リニュロン 7.5%	継	効果・薬害の再検討。					
4. KUH-813 細粒 ・オルソベンカー ブ 8% ・リニュロン8 1.2%	継	効果・薬害の再検討。					
5. EL-107 水和 ・イソキサベン 50%	継	効果・薬害の再検討，特に後作物に対する影響。					
6. ANK-553 細粒 ・ペンディメタリ ン 2%	実・継	土 壌	播 種 後	500～600 g	壤土～埴土 〔但し，温 暖地以西 は砂壤土 ～埴土〕	寒冷地（畑 作），温暖 地以西（水 田裏作）	1) 砕土，整地，覆土は 丁寧に行って均一散 布に注意する。 2) 対象：二条・六条大 麦・裸麦。
7. DBN 粒 ・DBN 1%	実・継 （前年通 り）	生育初期	麦2～3 L スズメノテ ッポウ1.5 Lまで	400～500 g 500～600 g	壤土～埴土	寒冷地南部 （水田裏作） 温暖地以西 （水田裏作） 〔但し，温 暖地西部 は裸麦の み〕	1) 砕土，整地，覆土は 丁寧に行って均一散 布に注意する。 2) 対象：二条・六条大 麦・裸麦。
8. UBH-508 水和 ・未公開 20%	継	成分未公開					

C. い め さ

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量/a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1. MY-93E 乳 ・MY-93 7% ・MY-71 6%	継	効果の再確認。					

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量／a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
2. MC-79 粒 ・ビフェノックス 7%	実・継	湛水土壌	4月上旬～ 中旬（雑草 発生始まで）	300～500g 〔但し、温 暖地西部 は400～ 500g〕	壤土～埴土	温暖地西部 以西	1) 冬雑草を有効除草剤 で防除した後に使用 する。
3. NP-55 乳 ・セトキンジム 20%	実・継	茎葉（落 水）	イグサ先刈 り後（5月 中旬頃）	15～20m/l	全 土 壌	温暖地西部	1) 冬雑草を有効除草剤 で防除した後に使用 する。
			イグサ先刈 り後～ノビ エの5Lま で	15～20m/l		暖 地	2) イネ科一年生雑草対 象。
4. SL-236 乳 ・フルアジホップ 35%	実・継	茎葉（落 水）	イグサ先刈 り後（5月 中旬頃）	10～20m/l	全 土 壌	温暖地西部	1) 冬雑草を有効除草剤 で防除した後に使用 する。
			イグサ先刈 り後～ノビ エ5Lまで	10～20m/l		暖 地	2) イネ科一年生雑草対 象。
5. SL-236㊟乳 ・フルアジホップ －P－ブチル 17.5%	実・継	茎葉（落 水）	イグサ先刈 り後（5月 中旬頃）	10～20m/l	全 土 壌	温暖地西部 以西	1) 冬雑草を有効除草剤 で防除した後に使用 する。 2) イネ科一年生雑草対 象。

D. 水 稻 刈 跡

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量／a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1. SC-224 液 ・スルホセート 40%	継						
2. NHS-50 粒 ・塩素酸ナトリウ ム 50%	継						

E. 生育調節剤

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量／a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1. CCC 液 ・クロルメコート 46%	実・継 （寒冷地 以西への 拡大可能）	茎 葉	出穂前10～ 20日	50m/l	全 土 壌	寒 地	秋播小麦の倒伏軽減効 果。
			6L期前後 （草丈30～	20m/l			春播小麦の倒伏軽減効 果

薬 剤 名	判 定	内 容					
		処 理 法	処理時期	使用量/a	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1. CCC 液 (つづき)			40 cm)			寒冷地以西	小麦の倒伏軽減効果。
			出穂前20～40日				
3. エテホン 液 ・エテホン 10%	実・継	茎 葉	出穂始期	200～300 ^{ppm} 5～10 l 〔但し、寒 地、温暖 地東部は 10l/a〕	全 土 壌	寒地、温暖 地以西	小麦対象、倒伏軽減効果。
	実・継	茎 葉	出穂始期	200～300 ^{ppm} 5～10 l/a 〔但し、温 暖地東部 は10l/a〕	全 土 壌	温暖地東部、 暖地	二条大麦対象、倒伏軽減効果。

昭和61年度春夏作野菜花き関係 除草剤・生育調節剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部

昭和61年度春夏作野菜花き関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会は、昭和61年12月16～17日、薬業健保会館（東京都千代田区永田町2－17－2）において開催された。

この検討会には、試験場関係者95名、委託関係者等72名、計167名が参集し、29作物に対す

る除草剤89試験342点、13作物に対する生育調節剤28試験80点、前回未検討除草剤10試験21点、生育調節剤10試験15点について、試験成績の報告後、慎重な検討が行なわれた。

その判定結果については、次表に示すとおりである。

昭和61年度 春夏作野菜・花き関係委託試験薬剤および判定表

A. 除 草 剤

作物名 (品 種)	薬剤名・剤型 (商品名) 〔委託者名〕	有効成分および含有率 (%)	試験の種類 新 規 の 別	試験実施場所 (数) ()=中間 or試験中	試験設計〔作型、対象雑 草〕 処理時期; 散布薬量<水 量/a>; 処理方法	今 回 判 定	
						結果	内 容
1. 野菜一般	(1) EL-107	イソキサベン	作用性 新 規	植調研.	* 詳細一任.	継	・効果・薬害について